記事

新しい表現が生まれる織物の現場

――約180年にわたり川島織物セルコンが継承する文化と技術

表現の魅力は，直感に響く美しさに加え，その背後にある技術，歴史，文化を理解することで，より深く感じ取ることができる．川島織物セルコンは2019年からミラノデザインウィークへの出展を続け，この挑戦の場を通して新しい表現を模索し続けている．今回，2026年のミラノデザインウィーク出展を牽引した担当者に，表現と技術，文化などについて話をうかがった．（編）

183年にわたり継続する「一貫生産体制」

川島織物セルコンは，1843年に京都で呉服悉皆を生業とする「上田屋」として創業した．以来，京都・左京区の市原事業所に染色場や燃糸設備，手織り・機械織りの織機を備え，織物の製造工程を自社の職人が担う「一貫生産体制」を継続している．こうした環境を基盤として，伝統的な技術を継承すると共に，新しい素材や技法を取り入れた表現にも取り組んできたという．

新たな表現への挑戦

――ミラノデザインウィークへの出展

織物文化と技術を世界へ発信するため，同社は2019年より「ミラノデザインウィーク」に出展している．2026年のテーマは「織の地層 – WOVEN STRATA –」．時間をかけて土や岩石，有機物が堆積し，固有のテクスチャを形成する「地層」と，経糸に緯糸を重ねていく織物のプロセスを重ね合わせた．同時に，1843年の創業以来，京都の地で積み重ねてきた織物技術そのものを「地層」と捉え，現代的なアートワークとして空間化する試みでもある．展示では，職人の手による綴織のタペストリーや「西陣織」，マシンタフトによるカーペット，ジャカード織によるテキスタイルという，異なる4つの技術を展開した．ここでは，その中からふたつの表現と技術を詳しく紹介する．

綴織（つづれおり）タペストリー

――流し織と有機的な変形形状

巨大な変形タペストリー「Strata_1」は，劇場の緞帳などを製作する手織機を用いて織り上げられた．基本となるのは，経糸が見えないほど緯糸を強く打ち込み，絵柄を描き出す「綴織」である．

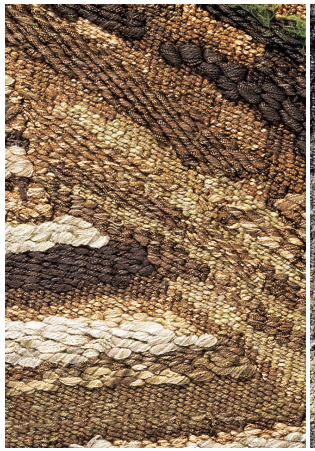
今回の作品では，地層の緩やかなうねりや傾斜を表すため，経糸に対して緯糸を斜め，あるいは曲線状に織り進める「流し織」を採用した．6本以上の異なる色の糸を撚り合わせた緯糸によって，複雑なグラデーションや凹凸感を生み出している．綴織では絵画を描く際に絵の具を入れ替えるように，さまざまな色の緯糸を部分的に使ってデザインを表現する．そのため，色の切り替え部に生じた隙間「ハツリ目」を製織後に裏側から一針ずつ縫い合わせることによって，作品を補強する．また，通常は四角形となる織物の輪郭そのものを崩し，有機的な外形へと展開した．

また「Strata_2」では，地層の岩肌のような立体感を表現するために，袋状に織り上げる「風通織」の技法を用い，袋内部に「あんこ」と呼ばれる詰め物を入れた．緯糸には，岩石が結晶化して光る様子を表現するため，梱包用のポリプロピレン製ビニール紐や，貝殻の破片を手作業で入れた貝の糸などの，通常のテキスタイルにはない異素材を意図的に緯糸に混入させた．分解されずに地層に堆積するプラスチックを用いることで，アートとしての批評性をも内包させている．

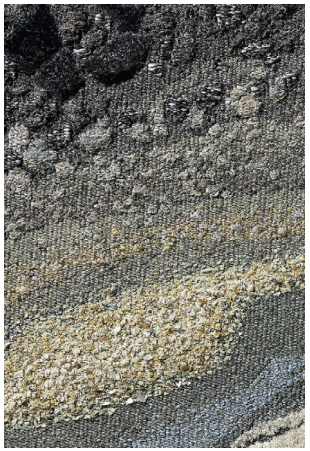
ジャカード織の土壁テキスタイル

――糸の収縮差と加工による凹凸の表現

版築の層状のパターンや，左官職人が残す波状のコテ跡，厚く塗った泥が乾燥する過程で生じるひび割れなど，土壁の多様な表情をジャカード織によって表現した．層の重なりや表面のうねり，亀裂といった特徴を，糸の組み合わせや撚糸，織組織の工夫によって，布地の立体的な表情へと置き換えている．「Soil_1」「Soil_2」では，経糸と緯糸に収縮糸を用いて多層的に織り込んだ．糸そのものの質感に加え，収縮の違いを利用することで，土壁の起伏を思わせる三次元的な表情を生み出している．また，「Soil_11」では，有機的なテクスチャーを表現するため，岩肌の粒感やざらつきを表現した生地に熱と圧力を加えるプリーツ加工も表現に取り入れた．加工の際には，あえて手作業で布地をくしゃくしゃにすることで，自然なムラのあるシワをつくった．機械織りによる布地に手作業を加え，不均一なシワを土壁のひび割れに見立てることで，自然素材が持つ表情を実現している．

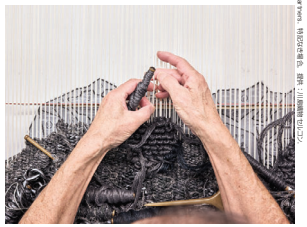


綴織タペストリー「Strata_1」．異なる色の糸を撚り合わせた緯糸によって，複雑なグラデーションをつくり出す．*



石が砂へと還る移ろいを描いた作品「Strata_2」．地層の岩肌のような立体感を表現するため，風通織を用いた．*





手織りの工程．下絵（写真下）を置いて織り上げる．*

*上段：左2点，＊＊撮影：Masahiro Goto，＊＊撮影：Soshi Oyama（Nacása & Partners），特記以外は撮影：川島織物セルコン





上：ジャカード織によって表現した土壁のような質感のひび割れや凹凸．「Soil_2」（左）と「Soil_1」（右）．＊＊
下：岩肌の粒感やざらつきを表現するためにプリーツ加工を施した「Soil_11」．＊＊



ミラノデザインウィーク2026の会場展示の様子．＊＊

伝統技術から広がる表現

展示ではこのほか，同社のものづくりの源流である「西陣織」の帯の技術を用いたアートワーク「Onyx_2」も制作した．金銀や漆・螺鈿（らでん）などで装飾した和紙を糸状に裁断して緯糸に用いる技法「引箔」によって，絵柄を織物の中に再構成している．また，カーペット「Onyx_5」では，タフト織にデジタル技術による染色を掛け合わせ，天然石の結晶を思わせる複雑な表情を生み出した．伝統的な手仕事から機械織り，デジタル技術を取り入れた表現まで，多様な技術を組み合わせることで，「織の地層」というテーマを多面的に提示している．

モノを通して対話し，デザインを進化させる

――熟練と若手の職人による継承

伝統工芸の現場で後継者不足や高齢化が課題となる中，同社では若手職人の育成を継続している．市原事業所では，熟練職人と20～30代の若手が共に仕事をし，技術を実践の中で継承する．今回の出展作品にも，若手の職人がベテランと共に携わった．

同社では，皇室関連の特殊な織物や，最大幅80尺（約24.2m）の緞帳を織る大型綴織機など，限られた機会にしか用いられない技術も保持している．そうした仕事は10年，20年に一度となることもあり，次の機会まで技術を維持し，磨き続けるためには，日常的に挑戦の場をつくる必要がある．ミラノデザインウィークへの出展も，その実践のひとつとして位置付けられている．

約180年にわたり継承してきた同社の織文化は，歴史であると共に，今なお変化し続ける分野である．世界的な建築家との大規模プロジェクトだけでなく，次世代を担う建築家との協働にも積極的で，そうした機会を通して新しい表現や技術を生み出してきた．京都・市原の現場では，ものづくりの文化と技術，そして変化を続ける過程の一端を見ることができる．

（2026年8月27日，川島織物セルコン東京ショールームにて，文責：新建築編集部）

企画広告 川島織物セルコン

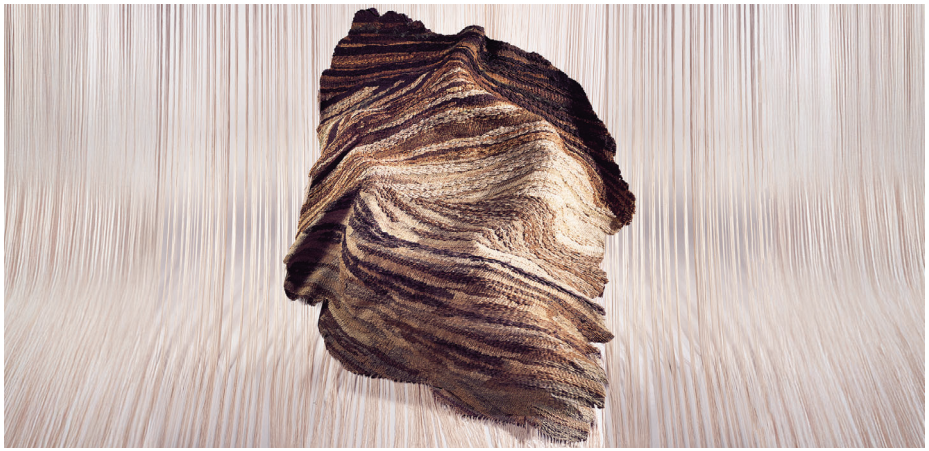
「織の地層― Woven Strata ―」特別展（大阪・東京）

ミラノデザインウィーク2026に出展した21点を展示

大阪会場
開催期間：2026年11月10日（火）・11日（水）
開催時間：10:00～17:00（最終受付 16:00）
会場：サンライズビル大阪3F ホールA

東京会場
開催期間：2026年11月25日（水）・26日（木）
開催時間：10:00～17:00（最終受付 16:00）
会場：東京国際フォーラム5F ホールB

＊予約制（一般来場者可）　特設サイト



「織の地層」キービジュアル．地層の断面を表現した「Strata_1」．有機的な形状に挑戦した．*